



小松左京

継ぐのは誰か？
果しなき流れの果に



早川書房

世界SF全集 29

小松左京 継ぐのは誰か？ 果しなき流れの果に

〈検印廃止〉

1976年7月10日再版印刷 1976年7月15日再版発行
発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2
発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2
電話 東京(254) 1551(代) 振替 東京6-47799
印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社
本文用紙・本州製紙株式会社
表紙クロス・日本クロス工業株式会社
函紙・富士加工製紙株式会社
製函所・株式会社佐藤製函所 定価 1300円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えいたします〉

目次

継ぐのは誰か？…………… 3

果しなき流れの果に…………… 225

解説〈石川喬司〉…………… 483

函・扉・表紙／勝呂 忠

継ぐのは誰か？

小
松
左
京

第一章 予告

チャールリーを殺す……

だれ？

期限は、今のところ、つけない。だがいずれ通告することになるだろう。——チャールリーを殺す……

だれだ、君は！

だれでもいい……。君たちみんなに、たしかに予告した。——チャールリーを殺す……

なぜだ？ チャールリーになんのうらみがある？

うらみなぞない……たまたま、チャールリーがふさわしいと思ったからえらんだまでだ。そして、彼の仲間である、君たちみんなに通告した……。

まて！ 君はいったい……

これはゲームなのだ。同時にテストでもある。ちょっとしたあそびだよ……。君たちみんな、力をあわせ、

知恵をしぼってチャールリーをまもってやるんだな。私
は……チャールリーを殺す……

1

人類は完全じゃない——それが、最近ぼくたちの間で、何度もむしかえされる議論のテーマだった。そんなことはむろんわかりきったことだし、それをいったところで、どうなるというものでもなかった。

もともと、どうしようというための議論でもなかったのである。そのテーマは、最近のぼくらの間における、一つの流行にすぎなかった。そんなことは、ずいぶん前から、何百人という人々がいったことだ。——だが、ぼくらの世代、そしてヴァージニア大学都市のサバティカル・クラスでたまたま一年をいっしょにすごすことになった仲間たちにとっては、それは何度もむしかえしくりかえすことのできる、新鮮な発見だったのである。

人類は、完全じゃない……。

こんなことを、今さら、ぼくたちの仲間のいったい誰がいい出したのだろう？——今となつては全然思ひ出せない。

だが、誰かがそれをいい出した時、それはたちまちぼくらのお気に入りのテーマになった。午休みの芝生の上で、ダウンタウンの喫茶店で、寄宿舎のパーティで、ぼくたちはよるとさわるとそのことについて議論した。しまいには、めいめいがその議論のはてに、最後にいう結論めいた言葉さえきまってしまった。

「たしかに、人類は完全じゃない」と神学者みたいな顔でいうのは、アドルフ・リヒターだった。「だが、人類が完全じゃない、ということを理解できるということは、とりもなおさず、『完全』という尺度を人間が知っている、ということだ。——これはどういうことなんだろうね？ 不完全な人間が、はたして本当に完全なものを表象できるのか？ それとも、人間は自分は不完全でも、その不完全な存在を超えて、完全なものを考えることができるようになってるのか？」

「何回いったらわかるんだ。そんなの古くさい問題だよ」
いらいらしたみたいなのは、赤髪で大男のディミトロフ・ポドキンだ。「人類は、完全じゃないけど、向上するさ。——時代をこえて……」

「どこまでだい？」と皮肉な眼つきで、まぜっかえすようにいうのは、とんがった顎ひげをはやしたホアン・クリス

トバル・ディアスだった。「なんだか、限界が見えちまったような気がするぜ。——そのことをふくめて、人類は完全じゃないといってるんだらう？」

「ギリシャは完全だった……」芝居がかった身ぶりで立ち上り、眼を天井にむけて歩きまわってみせるのは、金髪のヴィクトール・ドラリュだ。「おお、わが友アキレスよ。血ぬられし諸手もて、戦士の強類くびるオデッセイよ、ヘラクレスよ、アドニスよ——人類はかつて、あるがままで完璧だった。それが今はどうだ？ エア・コンディショニングがちょっとくるったらアレルギーを起し、みみずのようなりビドーの切れっぱしを後生大事にかかえている青白い猿だ……」

「君のおじさんのルソーによろしくいってくれ」とチャールズ・モーティマーが笑いながらまぜかえす。「おじさんが子供の時は、街角で、むこうからやってくる御婦人をびっくりさせるほど元気だったのに、あなたの甥たちは、みんなインポになっちゃいましたってな」

「いや！ チャーリー——あなた下品よ」とフウ・リャンが身をよじって笑いこぼれる。

「あせることはないさ」ぼくはニヤニヤ笑いながら教訓を垂れる。「人、なべてその日々をつくせ、だよ。どこまで

行けるかは、おれたちの時代に答えが出っこない」

いつもだまっていかにこしてゐるのは、黒人のサム・リンカーンと、ポリヴィアからきた、クーヤ・ヘンウィック、それにミナ・コロデーだった。——ぼくは、その話に時々わりこんだが、大ていの場合はいき役にまわった。——みんな、冗談めかして議論していたが、この話題には、どこかみんなの深い所にふれるものがあつた。すくなくともぼく自身はそうだった。ぼくが、あまりみんなといつしよになつて、機知のきいた会話のやりとりに参加しなかつたのは、この問題を、一片のバーティ・ジョークのようにとりあつかうのに、何となくたえられなかつたからだ。——みんなだつて、半分は本気だった。しかし、半分冗談だったこともたしかだった。つい数十年前の歴史のことを考えてみれば、現在は「最高」だった。戦闘はついに、この地上から消えた。こんなことが長くつづくわけはない、とぼくらの父親たちはいつた。またどこかで、ドンパチがはじまるにきまつてゐる。——人間の恨みというものは底が深い。人類社会の中は、おくれた部分がいっぱいある。

だが——不思議なことに、それはずっとおこらなかつた。おこらずに、二十年たち、二十五年たつた。もう、今では誰も武力をつかつた戦争は、二度と起らないだらうと思ひ

はじめてゐる。ぼくたちの世代のことをおとなたちは「終戦ッ子」とよんだ。——なにか、ちょっと皮肉めいた冗談の意味がふくまれてゐるらしいのだが、ぼくらにはよくわからない。ぼくたちはただ、「地上最後の戦闘の終結した年」に生れた世代だとうけとてゐる。——むろん、すべての問題が解決したわけじゃなかつた。低開発地帯における人口爆発は、最近になつてやつとおさえこむ態勢にはいつたところで、まだ完全にフォールとまでは行かなかつた。もえ上つた油に毛布をかけた時みたいに、あちこちの隙間から、まだチョロチョロ炎が吹き出し、いつまた、毛布そのものが燃え上るかわからなかつた。食糧増産は急テンポで進んでゐたが、人口問題との、いらだたしい、proletarian の状態を解決する方式をFAO（食糧農業機構）のコンピュータは、やつと数年前からはじき出しかけてゐるところだった。巨大で不気味な「新型」の中央集権国家となつた中国は、人口十二億に達した時、やつとかたく閉ざしてゐた門扉をひらきかけた。アフリカ新興諸国の統合はすすんでゐたが、新しく誕生した「連邦」の中は、まだ火をひいたばかりの鼎の中のように、グツグツと煮えくりかえてゐた。——軍隊と軍隊、国家と国家との武力衝突はなかつたが、ここでは、テロやデモ隊と軍隊との流血

はまだくりかえされている。——国際間の問題は、まだまだいろんな紛糾のたねがつきなかった。半世紀ももみあいながら、まだ片のつかない領土問題があり、宗教上の古い古い対立があり、歴史的な国家の確執があり、貿易赤字や国際的産業競争や、ある民族、ある国家の無気力化などという問題があった。にもかかわらず——すくなくとも表面的には——事態はあらゆる面にわたって、「好転」しつつあるように見えた。春のあけぼののように、そんな雰囲気、ぼくらの育ってきた時代の、あらゆる所に感じられた。時代はたしかに上昇しつつあった。——だからこそ、その上昇の中で、人類そのものにけちをつけることは、痛快でもあったが、やや軽薄めいた感じをまぬがれ得なかった。

ちがうのはぼくだけだ、とは決していわない。——みんなひょっとしたら、めいめい一人きりになった時、それぞれ考えているのかも知れなかった。しかし、ぼくは、特にそうだったといえる。この問題になると、いつもなんとなく、考えこんでしまうのだ。ぼくがその問題を語りあうのは、ミナ・コロディとだけだった。

「ひょっとしたら……」と、臨時のパーティが解散してしまつたあと、ぼくは大学の中を、宿舎にむかつて歩きながら、ミナにいった。「人類は、いまが絶頂じゃないかね？」

「どうして？」ミナは頬にかかる金髪を手ではらいのけながら、クスツと笑った。「黄金時代のはじまりって、ヘザ・グローブの社説に出てたわよ」

「短期的にはそうかも知れないね。だけど、黄金時代が本当にはじまつたらはじまつたで……そのとたんに、人類は重大な精神の危機に立たされるにきまつているんだ。これはまったく簡単に、洞察できるんじゃないかな？ 黄金時代は、古代においては失われた幻影だったし、中世においては天上のバラだったし、近世には海の彼方の不在の理想郷だった。近代においては永遠に到達しがたい社会の目標で、半世紀前においてさえ、それはいつくるかわからない遠い未来だった。だが、いつの間にか——ここ数十年か、あるいは数十年の間に、そいつは、突然はじまつちまつた。実現しそうなもの、いきなり現実を訪れはじめた。となると——いったいどうなるんだ？ かつての目標——長い長い人間の目標だったものが、突然達成されはじめ出したら……じゃいいたい、その時期にうまれてきた世代は、今度は何を目標にしたらいいんだ？ こいつは大問題だと思わないかい？——ねえ、ミナ、ぼくたちは、時間というエスカレーターにのっけられて、自動的にこの時代の中に押し上げられて行く。ところが、この花やかで上に行

くほどすばらしい栄光で光り輝いているエスカレーターの、金色燦然たる頂上のむこうには——何もないんだ。光と聲、びにみちた虚無があるだけなんだ！」

「すると、あとはまっさかさまってるわけ？」ミナは、かすかに苦笑するように小首をかしげて、その深い、菫色の眼を、ぼくにむけた。

「ちがうよ、ミナ。君は虚無ってものの性質をとりちがえているよ。虚無というやつは——おちて行くべき奈落さえないんだ。すべてがあり、そしてささえるものはなにもない……」

「私は、別にいまが『黄金時代のはじまり』だなんて、思っちゃいないのよ」ミナは、ベンチの傍でたちどまった。

「すわりましょうよ、タツヤ」

ぼくたちは、ベンキがほとんどはげおちたベンチに腰をおろした。木肌が陽ざしをすってあたたかかった。

あたたかく、満ち足りた金色の虚無……。

キャンパスには人影もなく、アン・トウ・カをしきつめた赤黒い道には陽炎がもえ、両側の芝生はみずみずしい緑にかがやき、大気はかすかな花の香と、眠くなるような蜜蜂や、花虹の翅音にみちていた。——ベンチの背後は、樫の木の間で、よく繁った枝葉の下で、そこだけが明るい陽

だまりになっている。春の日は、アパラチャ山脈の上にわずかにかたむきかけ、晴れわたった空には、白いちぎれ雲がいくつもとんでいた。——眼をつぶると、臉の裏に、赤と金の太陽の光がうずまく。背と尻は木肌にあたためられ、顔から胸にかけて、あたたかい、金色の湯のような、陽光のしぶきがしたりおちる。——ぼくは、ベンチにすわって、陽ざしに眼をほそめながら、もう一度自分のいった言葉を考える。

あたたかく、快適で、そしてなんにもない虚無……。

体の奥で、かすかに不快な戦慄が走る。恐怖に対してあらずさうしようとする衝動が、よわよわしく動く。——金色で、もやもやして、そしてなんのささえもない、つんのめりそうになったら、そのままゆっくり回転し、足の下にも、周辺にも、手足をつっぱるべき何ものもない。上も下もなく、おちることできない快適な無重力空間——ふと、齒の浮くような、異様な恐怖と不快のまじりあった記憶がよみがえる。ちょっとした遊び気分——そう、中学三年の休暇に、宇宙ステーションを見学に行った時——宇宙服を着て、宇宙空間へ出てみた。その時、頭の中では、自由落下の理論も、何百万人という人のやった、宇宙遊泳の安全性も陳腐さも、充分承知していながら、やはり「ささ

のない、したがって方向のない空間」にふみこんだとなん、何ともいえない胸の悪さと、とらえどころのないものの中でもがく、焦りにも恐怖感を味わい、額に脂汗がべっとりにじんだ。——そいつに似ている。

「私はむしろ、『黄金時代』なんて、あり得ないと思うのよ」ミナは、おとがいをラベンダー色のハイネックのセーターの襟もとにうずめるようにしてつぶやいた。「ヘザ・グロープ」の記事を教えたあげただけよ。あそこの論説員って、みんな少し調子がよすぎるのよ。いい気なものね。——よしんば、それに近い状態であっても、することはいくらかでも見つかると思うわ」

「することはあるさ、いくらでも……」ぼくはかすかな焦立ちを感じながらいった。「世界連邦救済機関や、宇宙開発公社へ行けば、たったいまやらなければならぬ仕事というやつは、ごまんとある。——だが、失われつつあるのは、人類全体——われわれ全体が、総力をあげて目ざすべき目標さ」

「あなたって、観念的ね」ミナは、眼を伏せてつぶやいた。「男の人って、みんな観念的だわ。——過程とか、具体的な全体像をすつとばして、尖端ばかり見つめて……女と、根底的に、世界を見る立場がちがうのかしら?」

そんなことはないはずだが……と、ぼくは焦立ちを押ししずめながら思う。過程もわかる。「具体的な全体像」ってやつもわかる。だが、さらにその上に、人類の目標喪失というやつもわかるのだ。——女は、そのことがわからないのだろうか? わかっても、男みたいにいらいしないのだろうか? あるいは立場は同じでも、見るパターンがちがうのだろうか?——それとも、このヴァージニアのサブティカル・クラスにくるまでの間、世連のインド防疫センターに、三年いたという彼女の経歴が、そのメランコリックな基調をつくり上げてしまったのか?

「人類っていうけど——人類は発生以来、なにごと、根底的に解決してこなかったし、人類なんてちっともかわってないと思うわ」ミナは、たれかかる金髪をうるさそうにふりあげながら、悩ましげにいった。「わたし——わたし、正直いって、人類、つきらい……。どうしても、好きにないところがある」

「その点は、ぼくと同じだね」ぼくは、ミナの、雪のように白い、ほっそりとした手をとってもてあそびながらうなずいた。「ぼくもそう思うし、人類は完全じゃないと思う。——ホモ・サピエンスってやつは、どうも、本質的に、つばいなり、切れないところがあるんじゃないかね。どこか卑

しく、どこか凶悪で……その意味で、人類は「種」として完全じゃないということ——つまりこいつの限界が見えてきたような気がする」

「でも、そこから先がちがうのよ、タツヤ……」ミナはほえんだ。——彼女の笑いには、時々奇妙なかげりがあらわれ、それがわびしげな、同時に謎めいた雰囲気をつくり出す。「そういった人類を、私、愛してはいるのよ。わかる？」

「わからんな」ぼくは少しおどろいて、ミナの顔を見た。

「きらいなのに、愛しているのかい？」

「そうよ——あなたには、まだ、そういった女の心理はわからないでしょうね」

「ママ——ママ！……」するどく、かん高い声がきこえた。小さな足音が通りのむこうから、パタパタちかづいてくる。

「ジャコボだな」ぼくは声のする方を見た。

黒っぽい、小さな姿が、植えこみのむこうからころぶようにかけてきた。——ちぢれた黒い髪の毛、細くとんがった灰色の顔、白く光るおびえたような眼、背が低く、四肢がなんとなく病的に細い。小ざっぱりした服装をしているのに、全体にその服が、体つきにまるきりそぐわないよう

なところがある。

「どうしたの？」

ミナはベンチから手をのべる。——子供は、かけよって、その黒い、小さな手でミナのスカートをつかみ、ちよっともつれるような言葉つきでいう。

「ママ……こわいよ。ブンブンいう虫が、刺すよ」

「蜜蜂は、こちらがいたずらしなきゃささないわよ」ミナは、子供の手をとってさとすようにいう。

「いたずら、しないよ。虫がきたので、手をふりまわしたら、さしたの」

ジャコボは手を出す。——手首の下所が、はれ上っている。ミナは、マニキュアしてない爪先で、手早く皮膚につきささった刺針をぬきとってやり、ポケットから軟膏を出してすりこんでやる。

「さあ、これですぐなおるわ。——蜜蜂は、クローバーの花の蜜をとるのよ。だからクローバーのないところであそんでいらつしゃい。——夕方になる前に、お部屋にかえるのよ」

子供は、またパタパタとかけ去って行く。

「あの子は泣かないね」そのあとを見おくりながらぼくはいった。

「泣くのよ」ミナは抗議するようにいった。「でも、どういうわけか、涙を流さないの。犬の遠吠えみたいな声で、涙を出さずになくわ」

「君はいつまで、あの子を育てるの？」

「わからないわ」ミナは、うるんだ眼を、しばたいて、遠く小さくなって行くジャコボのあとを見送った。「どこか、あの子がひけ目を感じず、おしつぶされず、一生をのびのびとくらして行けるような所を見つけないと……私、このごろ考えるの。どうしようもなかったけど——やはりあの子を連れてきたのは、まちがっていたかも知れないって」

ミナは、デカン高原の奥地の森林中で、ほとんど文明と接触したことのない、少数の未開民族を見つけた。彼らはハンゼン氏病（癩）と天然痘で絶滅しかかっていた。ジャコボは、うまれて八カ月で、母親が天然痘で死んだ。ジャコボは、その時まで元気だった。——かつて二百人以上いたと思われるその集団は、急激な天然痘の蔓延により、ミナたちが発見した時はわずか十数人になっており、子供はすべて感染していた。ジャコボ——むろん、それはミナのつけた名だったが——は、急いで隔離され、そして結局彼は、その名も知らぬ種族の、ただ一人の生きのこりとなっ

た。ミナは、その子をずっと手もとにおいて、育ててきた。「ジャコボは、元氣そうじゃないか」とぼくはいった。

「腺病質よ」ミナは首をふった。「前は、よくひきつけを起したわ。それに——この間、心理学教室の方で精密テストしてもらったら、やっぱりIQが低い。それだけじゃなくて——サイコメトリックスの結果を見ると、精神構造のパターンが、ノーマルな幼児とちがっているのよ。なんていうか——原始人型なのね。というよりも——」

「なんだね？」

「私、心理学教室の連中と、大げんかしちゃったわ。——あずけているうちに、私にだまって、動物心理学教室にまわして、測定させたのよ」

遠くで、ジャコボのかん高い声がした。——雲塊が太陽をかくし、まわりの陽がすつとかげった。

「ジャコボはいやがってたかい？」

「わからないわ。——でも、おびえてみたい。あの子の精神構造や知能・感覚・反応特性は森林肉食小動物型ですって……」ミナは、両手で顔をおおった。

「そんなもの、教育によってどうにでもなるさ」ぼくはミナの肩に手をおいた。「子供ってのは、みんな野生動物の幼生みたいなものだ。——幼児段階の精神型で、決定的な

ものはないにない」

「だけど——その教育をうけつける知能そのものが低かったら、どうなるの？」ミナは、顔から手をはなした。——眼が赤くなっていた。「二歳からずっとやってるのよ。新しいIQでみて、あの子の平均値とのギャップは、ずっと、確実にひらいて来ているわ」

「四歳やそこらで、なにがわかるものか」ぼくは力をこめていった。「君は子供を育てたのは、はじめてだろう？——変化のチャンスは、まだ十代、二十代の急激な生理的変化の節ごとに何べんもあるし、それまでの体験如何で、どころぶかわからない」

「でも、あの子の心の窓が、どこかひらくことがあるかしら？——あの子にとっては、文明社会が、騒音にみちたジャングルに見えているんだわ。あらゆる刺激が、その精神の原初的模像のフレームにくみこまれて行くような気がするの。——建物は岩、部屋は穴、自動車は野獣、航空機は鳥、世界は敵意と危険にみちた森……」

「最初の六カ月を、デカン高原の森の中でくらしただ。きつと交叉いところ婚か何か近親婚をかさねてきた種族だろうし、——それに幼児精神にしたら、ごくあたり前のことじゃないか」

「でも、タツヤ——私にはわかるの。あの子の中で、そういった模像は、私たちが考えているより、はるかに強烈で、なまなましい具体性をおびているのよ。メカニズムの、概念的把握でもって、そういった原始型模像を修正する方は、てんでうけつけないの。彼にとっては、あらゆる知識は呪文みたいなものであり、言葉さえも呪文の一種なんだから……」

「といって——いまさら、デカン高原へかえすわけにも行くまい」

「そうよ。あの子は、もうすでに、どちらにとっても中途半端になってしまったわ。ジャングルの生活にも、文明生活にも……ジャングルへかえれば、あの子はもうそのきびしい生活について行けないでしょうし、といって、この文明には到底ついて行けない……」

「そういう連中は、今、世界中にたくさんいるよ」ぼくはベンチから立ち上りながらいった。「世界中のあらゆる地域社会が『世界』にむかってひらかれ出してから、まだ一世紀もたっていないんだからね。ジャングルと都市の中間地帯にいる、ということは現代人類の一般的状況じゃないかな。——ジャコボのことは、心配するには早すぎるよ。彼には、これから先、無限のチャンスがあるんだ」

「でも、私にはわかるの」ミナは頑固にいいはった。「あの子を——とんでもない所へ連れ出してしまったわ。自分で知らないうちに、私自身が、あの子にとっての『運命』の役割りをしてしまった……」

「じゃ、どうしたらよかったんだ？ あの子はインド奥地の森林の中で、天然痘にかかって、あの子の一族といっしょに死んでしまった方がよかったのか？」ばくは、少しつよくいった。——ミナはだまって、金髪をまさぐり、そいつを口の中にいれていた。

「ジャコボを、どこかの施設にいたら？——君には負担が重すぎるみたいだ」

「それはできないわ。一度は考えたけど……」ミナも、やっと氣をとりなおしたように立ち上った。「私、このクラスがすんだら、あの子と南米へ行こうと思ってるの。マツト・グロッソあたりに……。あの子にとって、私が運命だったみたいに、私にとっても、あの子が運命になるような氣がするわ」

こうして、**“母”**が誕生する——一組の母と子が……。今では、めずらしくないことだ。先進社会では、むしろ**“自分の腹を痛めた子”**をもつ母親の方が、めずらしくなりはじめている。あたり前になったフリーセックスと、副

作用の全然ない、しかも行為のあとで、のめばいい経口避妊薬の普及で、先進諸国では、どこも出産率の著しい低下がおこり、産児は奨励から義務化される傾向にあったが、それとて本人の希望があれば、妊娠三、四月で、政府公共施設が、無料で人工子宮への移しかえをやってくれるのだった。それとて、人口維持および調節には、まだ手ぬるいといふので、アメリカ、ヨーロッパ、日本などでは、国立の研究組織で、卵子から直接胎児を育てる研究をやり、もうほとんど実用化の段階までこぎつけていた。——生理調節剤で、着床中の卵子をとり出し、冷凍保存する。必要に応じて冷凍精液で受精させ、人工子宮で育てる。母体疾病の胎児影響などはまったくなく、免疫や遺伝コントロールも、完璧だ。

この上は、人工卵巣ができれば、女は遺伝子提供以外、まったくの用なしになるだろう、というのは、すでに、古い冗談だった。——マックス・プランク研究所と、京都大学生命科学研究所は、共同でグラーフ氏小胞の組織培養に成功し、フラスコの中の人工卵巣は、卵子を排出し、その卵子が受精させられて、三カ月まで順調に胎児に成育し、それが自然児——つまり母親の胎内で成長した胎児と、ならんらかわりのないことがたしかめられた。実験は、いまの